

萩原先生の思い出

宮本 正太郎

昨年は東京天文台創立百年のお祝があり、この程、記念出版物「東京天文台の百年」を頂戴し、ページをめくりながら、萩原先生はじめ諸先生方のお若い頃の写真を懐しく眺めている時、萩原先生御逝去の知らせを受け、ひとしお淋しく感じた次第である。

昭和十年代のはじめといえば、まだ戦前ののんびりした時代であったが、東京の萩原先生、京都の恩師荒木俊馬先生といえば、東西天文学界の若手第一級の学者としてまぶしいばかりの存在であった。両先生はどちらも明治三十年(1897年)のお生れであったが、荒木先生は昨年夏に急逝され、それより一年経たない今年一月、萩原先生も世を去られた。

私は京都の出身で、萩原先生のお教えを直接受けたわけではないが、先生の御高名は学生の頃からよく知っていたし、萩原先生のお弟子さんである故畑中武夫氏とは同じ分野の研究が縁で、親しく付き合っていた。

戦前、昭和十年代のはじめといえば、天文学の新しい分野である天体物理学がようやく一人前に成長した時代であった。物理では相対論と量子力学がようやく大学で講義されはじめた頃である。天体物理学関係では、これら物理学の新理論をふまえて、サハの電離論によって恒星スペクトルの解釈が可能となり、恒星についてのラッセル・ヘルツスプルング図表も確立されていた。正常の星の研究をふまえて、異常なスペクトル、特に輝線を示す特異星や星雲の研究が新しい分野として注目されていた。京都の荒木研究室では、荒木先生が先頭に立たれ、セフェイド変光星、白鳥座P星の研究がすすめられていたのであるが、東京では若手のホープ畑中氏が萩原先生の御指導で惑星状星雲の研究をはじめられた。萩原先生、畑中氏共著の論文がシリーズとして次々に発表されたのはこの頃である。萩原先生のお名前は天体力学の大家としてはよく存じ上げていたが、星雲スペクトルの分野にも積極的に乗出されたのには大いに驚ろいた。しかも、天体力学の御研究も捨てられたわけではなく、晩年には御研究の集大成としての大著を完成されている。御活躍の幅の広さとエネルギーは到底凡人の及ぶところではなかった。

学問研究だけでなく、東京天文台の台長となられてからの学術指導、行政の面での御活躍も衆知の事実である。戦後いち早く岡山に大反射望遠鏡をつくられ、これは東京だけでなく、全国の研究者に開放されてその恩

恵に浴すこととなった。この頃の文部省の雰囲気は、戦後の我国を再建するのに全力をつくさねばならない、天文学など無用の学問に予算をまわす余裕はないという厳しい調子であったが、萩原先生の実力はたいしたもので、遂に高額の予算がつけられ、岡山の大望遠鏡が新設された。

先生は学界のトップとして、日本天文学会はいうまでもなく、学術会議の天文学研究連絡委員会の議長として、長い間サービスされた。国内だけでなく、国際天文連合(IAU)の総会の時など、いつも会長と共にヒナ段に座っていた。これらの事は当然のことであるが、京都にいて先生の御動静の詳しい事を知らない私が驚かされたことに二つある。その一つは天体力学の大先生が星雲スペクトルの研究に乗出された事、その二は晩年テレビで日本舞踊を拝見したことである。しかも先生は舞踊の名取りでいられるということをおあとで東京の方から教えられた。

御生前、先生には、私が用事で上京した時お目にかかる程度であったが、お会いするといつも御忠告をいただいたものである。戦後しばらくして、私は花山天文台のお世話をすることとなった。天文台の機械は古く小さく、近代化のための予算もつかなかった。といって業績をあげなければ予算もねだる手がかりさえつかめない。小さい機械で出来ることといえば、太陽の観測か、月・惑星の観測である。太陽の観測については、幸にして川口市郎氏、神野光男氏等若手の有能な研究者が努力してくれた。私自身は月の地質と火星の大気大循環の問題と取り組むことにした。人工衛星第一号スプートニクが打上げられる少し前のことである。ところで、ある時、上京して萩原先生にお目にかかった際、先生は「お前はアマチュアになってしまったのか」と厳しくおっしゃった。お言葉の通りであると反省した。

一昨年、先生は岩波から出版された「天文学」の改訂版を海野和三郎氏の助力を得て出された。啓蒙書ではあるが、いかにも萩原先生の御著書らしいオーソドックスな権威のある本である。この本をお送り下さったので恐縮し、お礼の手紙を差上げたところ、早速お返書をいただいた。先生からお手紙をいただいたのはこれが初めの終りで、先生もお年のせいかわ優しくなられたものといささか不安でもあった。今となっては先生の御冥福を祈るだけである。